

訓練



耐熱服を着て消火訓練をする
隊員たち。瀬戸市東山路にて

対応し、耐熱服などを備えた向本部の化学車も駆けつけ、消火訓練をした。
市消防署東分署長の浅野

を見ることができ、大変勉強になった」と話した。
(加藤慎也)

文化センターで開かれている。十一日まで。
同団体は写真愛好家十五

水点下二二度の北海道
見市で撮影した朝日の
を出版した水野章一
(右)は「きれいだった
思わずにヤンキーと

長久手市岩作中繩手の長久手小学校に5月、生ごみを発酵させて資源化する小型バイオ装置が設置された。児童に資源の循環について学んでもらうことに加え、地域住民の利用を促し、ごみの減量を目指す。今月2日には吉田一平市長らが出席して設置セレモニーがあった。

長久手小に装置 生ごみから燃料や肥料



生ごみを投入する市職員。いずれも長久手市岩作中繩手の長久手小で

高さ二メートル、幅四メートル、奥行き二メートルの小型バイオ装置「MEGURUBIO(めぐるびお)」は、アマタホールディングス(京都市)が開発し、長久手市に寄付した。同日最大三十五キログラムの生ごみの投入が可能で、二十五日間でメタンガス三千リットル、液体肥料七

リットルに生まれ変わる。同社は昨年、市内の南中学校に、中高生向けの学習キット「エコシステム倶楽部」を寄付。家庭科の授業の際、給食で出たミカンの皮などを付属の装置に入れて資源に変える体験をしたところ、多くの生徒が積極的に使ったという。そ

資源循環 学ぶ場に

住民の利用も想定



吉田市長(左)から感謝状を受けた末次社長

こで学ぶの機会を広げよう。長久手小への「めぐるびお」設置が決まった。同社の末次貴英社長によると学校への設置は初めて。

セレモニーでは、吉田市長が「ごみを持ってくる地域の人が互いにあいさつをし、知り合つきっかけになれば」と期待。森田浩哉校長は「生活をしていれば生ごみは絶対に出る。活用すると資源になると学んでほしい」と話した。

同市が二〇二三年十二月に実施した可燃ごみの組成調査によると、生ごみは重

量ベースで全体の約37%。市は市民一人一日当たりの可燃ごみ排出量を本年度、三百九十五リットルにすることを目標としているが、二〇二〇年度は四百六十九リットルで約15%の減量が必要だ。

同校では、主に学校で活動するボランティアが生ごみを持ち寄り、学校で安全管理面を検討した上で、近隣住民にも活用してもらう予定。資源化されたメタンガスはその場でお湯を沸かす燃料として使っており、コーヒーを飲むまったり、液肥は花壇の植物に与えたりすることを目指す。

全国各地の風景などの写真展を展示。瀬戸市文化センター



重厚いなべ市の草薙鹿の影した写真は砂ぼこりい上がり、躍動感いっぱいだった。

から唯一選ばれた。上野公園や日本三楽園(水戸市)などたる公園と肩を並べ今年は指定から目。小牧山の麓にある念の企画展が開催中取材を通して初めて、といえは織田信長が

な

shaka 瀬戸市 051-8 日進通 051-7 春日井 0588-6 犬山通 0588-7 中日 052-22 center 掲載写真 最寄り

いの 大 費用、詳細 何て 0500 愛西市 瀬木